２０２１年度　公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費　実績報告書

2022 年　4 月　28 日

北九州市立大学長　様

（所属・職名）基盤教育センター・教授

（氏名）西田　心平

2021 年度に交付を受けた公立大学法人北九州市立大学特別研究推進費に係る研究実績について、次の通り報告します。

研究課題名	観光地に隣接した居住地域におけるｼﾋﾞｯｸﾌﾟﾗｲﾄﾞｾﾝﾀｰ機能の構築					
	合計	使用内訳（単位：円）				
交付決定額		備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
執行額	255,854	0	9,396	0	99,418	147,040
執行残額	255,746	0	20,604	108,000	10,582	116,560
共同研究者	所属・職名		氏名		役割分担等	

研究分野：

キーワード：観光地に隣接した居住地、シビックプライド、関係人口、ソーシャルデザイン

研究成果の概要（和文）

「観光地に隣接した居住地におけるシビックプライドセンター機能の構築」に関わる成果として以下の２点があげられる。

第１に、地域の当事者にとってシビックプライドを向上させる要素とは何かについて、当該地域でのフィールドワークを通して探り、「歴史」という観点から地域の物語を構成・発信することの重要性を発見したことである。

第２に、観光地である門司港レトロ地区に隣接する地元商店街に位置する案内スペースをシビックプライドセンター機能の観点からオープンさせることができたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

以上の２点が有する社会的・学術的な意義は主に次のような点である。

第 1 に、隣接し合う地域において観光地と居住地が「断絶」した関係にある状況を「連続」した関係にさせるためのスタート地点に立つことができたことである。

第２に、そのための方法について、単なる「シティプロモーション」といった表面的な観光振興でなく、「シビックプライド」という地域の内発的な愛着や誇りを向上させるための枠組みを仮説的に構築したことである。しかも、このことは、大学生が当該地域において、地域活動・フィールドワークを行いながら実践していくための教育デザインの構築とも関係している。

第３に、こうしたシビックプライドの向上および教育デザインの構築を通して、「地域創生」のあり方を検討していくための地域学的な研究の視座を提起したことである。このことについては、論文（「『海』と『道』からの生成誌ー北九州・門司港の地域学ー」北九州市立大学『地域創生学研究』第５号、2022 年３月）を発表することで行った。

1. 研究の背景

「観光地に隣接した居住地域」として本研究が対象としたのは、北九州市門司区における門司港レトロ地区に隣接する錦町･庄司･丸山などの各校区を含んだ地域である。地元商店街と重なり合う同地域は、観光地に隣接しながらもしばしば観光地と「断絶」した関係にあると言われてきた。具体的には、定住人口が高齢化し減少する中で、観光客の流入もなく、街の機能および景観などの点で、たしかに大きく断絶した状態が続いてきた。

近年では市産業経済局による観光客の回遊策が取り組まれているが、表面的な観光振興ないしはシティプロモーションに終始しており、実質的な回遊性の向上や滞在時間の長時間化には必ずしもつながっていない。

一方、対象地域の中では、住民当事者による既存の資源や空き家等を利活用したリノベーション事業などが取り組まれ、ギャラリーやカフェ、ゲストハウスなどが生まれている状況がある。こうしたエリアそのものの価値の向上を目指した取り組みは、コアとなる観光客や移住者などを含む「関係人口」の誘導に少しずつ寄与しているという事実もある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、単なる観光やシティプロモーションではなく、住民当事者のシビックプライドの向上とともに観光資源を磨きつつ、その魅力を発信するための事業を開発することである。そのための事業の拠点を上記の地元商店街の中におき、「観光地に隣接した居住地」の内側から情報を発信し、住民と観光客が交流できるスペースをつくることである。なお、地元商店街を活動拠点とするのは、同商店街そのものが、観光地（門司港レトロ地区）と「関係人口」を引き込みつつあるリノベーションによるエリアとの動線の妨げになっている現状があり、その商店街自体が、観光客と地元消費者との「交流の空間」へできれば、双方のエリアを「連続」した関係にすることができると考えられるからである。

3. 研究の方法

シビックプライドという「当事者性」を伴う概念を現実の地域の中に構築していくために、

本研究が参照した枠組みが「ソーシャルデザイン」という考え方である。これは地域の課題を総体的にとらえ、その解決のための道のりを「行為」の連なりとしてデザインする思考法である。これにもとづいて、本研究では調査活動としてのフィールドワークをシビックプライドセンター機能の構築へといたる行程において、次のような地域活動・実践活動として位置づけた。

第 1 に、大学生・教員が観光地と居住地を含む門司港地域の魅力探しと情報発信を行うことである。第 2 に、同じく大学生・教員が地元商店街における地域イベントに積極的に参加することである。第 3 に、地元商店街の振興組合の理事メンバーと教員・大学生との座談会を定期的に実施することである。こうした一連の行為（地域への関与的なフィールドワーク）に通底した目的は、主に次の 3 点である。①大学生と教員が門司港における地域課題を具体的かつ住民当事者の声を通して知ること、②住民当事者の中に大学生と教員が地域の情報源を確保すること、③地域の住民当事者にとって当該地域の何が愛着と誇りの要素となるのかを発見すること、である。

以上の方法をとおして、当該地域の当事者ではない大学生や教員が、「当事者性」を伴うシビックプライドという概念理解を深めつつ、その向上に資する対象を発見し、情報発信を行うことが可能になると考えた。

4. 研究成果

以上の取り組みを通じて得られた成果は、冒頭で示したとおり大きく次の２点である。

第１に、地域の当事者にとってシビックプライドを向上させる要素とは何かについて発見したことである。それは門司港地域の「歴史」的な経緯、観光資源、地域情報に関するものであった。大学生と教員がフィールドワークをとおして得たあくまで質的な理解によるものであるが、居住地域の住民当事者にとって自らの地域に対する愛着や誇りの源泉になっているのは、自らの地域が有している「歴史」の存在であることが浮かび上がった。

第 2 に、地元商店街に位置する案内スペースをシビックプライドセンター機能の観点からオープンさせることができた。これは第１の発見を踏まえた成果であるが、具体的には門司港地域の歴史的な経緯や物語を背景に持つ魅力的な関門景観の写真（大学生・教員が取材・撮影したもの）をパネルにして展示するというかたちで行った。訪問する地域住民からは「あらためて自分の地域の素晴らしさを知ることができた」といった感想、観光客からは「観光地だけではない魅力があることが分かった」といった反応を受け取っている。

一方、以上の成果は、本研究が目指す観光地と居住地を「連続」した関係とする上でスタート地点に立ったことを示すに過ぎない。地元商店街を含んだ居住地と観光地との動線づくり、リノベーションエリアとの連携、シビックプライドの向上を指標化することなどの取り組みを、より大きな研究デザインの中に位置づけながら、「関係人口」の流入と増加に努めていくことが今後も求められるだろう。